



加嶋 敬 名誉教授 略歴

- | | |
|--|--|
| 昭和13年 5月 6日生。鳥取県鳥取市 | 昭和63年12月 京都府立医科大学第三内科助教授 |
| 昭和32年 3月 鳥取県立鳥取西高等学校卒業 | 平成 1年 8月 同教授 |
| 昭和39年 3月 京都府立医科大学医学部卒業 | 平成10年 4月 京都府立医科大学医療技術短期大学部学部長 兼務 |
| 昭和39年 4月 京都第二赤十字病院 医師実地修練開始 | 平成13年 4月 京都府立医科大学附属病院内科主任診療部長 兼務 |
| 昭和40年 4月 京都府立医科大学第三内科学教室入局
大学院入学（内科学Ⅲ） | 平成14年 3月 同定年退職 |
| 昭和42年 4月 京都府立医科大学第三内科・消化吸収研究室 | 平成14年 4月 同名誉教授 |
| 昭和44年 4月 同副手 | 平成14年 4月～平成17年 3月
京都市立病院院長 |
| 昭和45年10月 医学博士（京都府立医科大学，甲第155号） | 平成17年 4月～平成24年 3月
京都市立看護短期大学学長 |
| 昭和46年 4月 京都府立医科大学第三内科助手 | 平成23年 6月～平成28年 5月
一般社団法人愛生会理事 |
| 昭和47年 4月 与謝の海病院内科 | 平成29年 4月～令和 2年 2月
医療法人社団石鎚会 介護老人保健施設
やすらぎ苑 |
| 昭和48年 5月 京都府立医科大学第三内科助手 | |
| 昭和53年10月～昭和57年 3月
同講師（学内），医局長 | 令和 7年 3月 16日逝去 享年 86歳 |
| 昭和59年 5月 同講師 | |
| 昭和60年 1月～昭和62年 1月
国立福知山病院 副院長 附属看護学校
副校長 | |
| 昭和62年 1月～昭和62年12月
ニューヨーク医科大学（解剖学）留学 | |

加嶋敬名誉教授を偲んで

京都府立医科大学名誉教授 加嶋敬先生が令和7年3月16日に永眠されました。享年86歳でした。先生のご逝去に際し、内科学教室消化器内科学部門・銀杏会を代表して謹んで哀悼の意を表します。

加嶋先生は、昭和13年に鳥取県鳥取市で誕生されました。先生は鳥取市に本社を置く日の丸タクシー（正式には「日ノ丸ハイヤー株式会社」）の御曹司だったとお聞きしています。同社の鳥取営業所には「鳥取観光マイスター」の資格を持つドライバーが大勢いて、タクシーの乗客に、鳥取砂丘の成り立ちや因幡の白兔伝説の舞台裏など、地元の歴史や文化を語りながら案内してくれるそうです。ここぞというときにはとても面倒見の良い加嶋先生の人となりは、このご家庭の生業からきたものかのように思われます。

先生は昭和39年に京都府立医科大学をご卒業になり、京都第二赤十字病院でのインターンの後、昭和40年に京都府立医科大学第三内科に入局されました。入局当時の先生のライター（指導医）だったのが、私（阪上）の実父で、兩人とも酒徒であったため二人でよく木屋町辺りへ一杯やりに行ったようです。父からは、「加嶋があれだけ偉くなったんは、俺の出来が悪かったからや。俺のお陰やで！」という解釈に苦しむことなどをよく聞かされました。

私が平成元年に第三内科に入局した当時、瀧野辰郎教授が昭和63年7月に急逝されていて間がなく教授空席で加嶋先生は助教授でした。第三内科はまだディビジョン化されておらず、肝臓、糖尿病、内視鏡、消化吸収、循環器、神経などの研究班があり、加嶋先生は消化吸収研究班の一員でした。平成元年8月に加嶋先生が第三内科教授に就任され、消化吸収研究班は片岡慶正先生（現・大津市民病院名誉院長）の切り盛りされるところとなり、教室は新体制となりました。当時は入局4年目にはどの研究班に入りたいかの希望を医局に提出し帰学（多くは院生）することに決まっていました。帰学直前、私は京都府立与謝の海病院（現・京都府立医科

大学附属北部医療センター）に勤務しており、研究班の決定にぐずぐずと逡巡しておりました。同期入局12人の中で最後まで決めかねていた私に、大学から電話をかけて頂いたのが加嶋先生で、「決めていないのは君だけだよ。じゃあ、消化吸収研究班に来なさい。」の一言でした。この一言が私の人生の羅針盤となり今に続いています。

先生は厚生労働省特定疾患対策研究事業・難治性膵疾患に関する調査研究班・分担研究者を平成3年～13年に、同・重症急性膵炎の救命率を改善するための研究班・分担研究者を平成10年～13年に歴任されました。研究班の中間報告や結果報告は決まって東京都千代田区大手町の経団連会館で行われましたが、片岡先生、保田宏明先生（現・済生会滋賀県病院副院長）と私が加嶋先生にお供することが通例となっていました。加嶋先生の多くの共同研究・各個研究プロジェクトの発表はお供の者が代行するのですが、帰路の新幹線では新横浜駅を過ぎた頃には加嶋先生がグリーン車を離れて我々の普通車まで来られ、車内販売のウイスキー水割りで労をねぎらって頂くのが常でした。京都駅到着後には加嶋先生行きつけのバーでさらに宴席が続き、加嶋先生の十八番の「昭和枯れすすき」を聞きながら、みな先生の温かい人間味を感じ取ったものでした。

豊かな人間性と膵臓病学の大切さを教えて頂いた加嶋先生に想いを巡らすとき、先生が嘗てご尽力なさった国立福知山病院（現・市立福知山市民病院）に、今こうして自らの職責を果たしていることに、言い表せないほどの縁を感じています。膵臓病学に真摯に取り組まれた姿と、あの柔和な笑顔と優しさを、私たちは心に深く刻み続け、心よりご冥福をお祈り申し上げます。加嶋先生、安らかにお眠りください。

市立福知山市民病院
 病院長・病院事業管理者
 阪上 順一